

登別市の観光行政を学んで

受入自治体：北海道登別市
氏名：張 晶
出身国：中華人民共和国
研修先：登別市役所



1. はじめに：

私は天津市人民政府外事弁公室に勤務し、国際交流の推進に関する仕事を担当している。大学で四年間日本語を勉強して、2007年から今の仕事に従事してきた。しかし、実際の仕事の中で、自分の語学力の不足や日本に対する理解の不十分さを痛感し、これからは中日双方の友好関係をさらに推進して、お互いの理解を一層深めることが私たちの役目だとしみじみ感じた。

今回、私は平成22年度自治体職員協力交流事業の研修員として日本にくるチャンスをいただいた。私は今まで日本を何度も訪問したことがあるが、北海道は初めてだ。観光資源が豊富で、優れた自然に恵まれた観光名所の北海道及び湯の国と呼ばれる登別市において、ここの観光行政はどのような実態なのか、どういうふうに運営しているかなどについて自分の目で見、体験し、研修生活を通じて、日本の伝統文化や観光現状をしっかりと学び、日本への理解を一層深めたい。

2. 研修概要：

(1) 全体研修(5月23日から6月23日まで)

5月23日、私たち協力交流研修員は各国から日本に到着し、研修生活が本格的に始まった。5月24日から25日まで東京で研修して、開会式、オリエンテーション、日本語のレベルチェックなどを行った。都内視察では国会議事堂と参議院などを含む日本の代表的な施設を見学させてもらった。

5月26日から6月23日まで約1ヶ月間、滋賀県の全国市町村国際文化研修所(JIAM)で日本語の研修を受けた。日本語の勉強をはじめ、日本地方自治講義、行政課題講義、日本の伝統文化や礼儀などについてさまざまな知識を学んだ。さらに、ジャスコ、オムロン工場を視察し、周辺の京都、奈良、彦根城などの観光名所を見物するなどして、大変勉強になった。研修の最終日に、成果発表会の舞台上、私たち研修員は1ヶ月間苦労して身につけた日本語の知識を利用してプレゼンテーションを見事に行って見せ、好評を博した。

(2) 専門研修(6月24日から11月16日まで)

6月24日に登別市に着任して、約5ヶ月にわたる専門研修が始まった。

① 一般行政研修

はじめの一ヶ月間、私は登別市役所で一般行政研修を受けた。毎日、市役所各セクション(総務部、市民生活部、保健福祉部、観光経済部、都市整備部、教育委員会、議会事務局、消防などが含まれる)の担当者からそれぞれの行政課題とその取り組みについて詳しく説明してもらった。また、市内の小学校や幼稚園、市民会館、市民活動センター、市民プール、クリンクルセンター(ごみ処理施設)、老人福祉センターなど関係施設も見学し、市の行政情報について全般的に把握することができた。特に消防研修の中で、消防士の専

用服を着、梯子に乗せてもらって、高いところまで運ばれた経験が深く印象に残った。

② 観光行政研修

7月26日、登別温泉町に位置する観光振興グループに移動して、観光行政研修が始まった。

実務研修：毎日、観光振興グループの一員として、同僚と同じように実務の仕事をしてきた。時には、登別市と隣の白老町がともに行った観光連絡協議会に参加した。会議の目的は、登別市と白老町の観光の更なる振興に資し、両市町の観光資源や施設、産業の関連を深め、当地域の個性を生かした多様な観光地作りを推進することにあるのだ。また、登別洞爺広域観光圏が主催する中国人誘客戦略検討会にも出席して、関係者と率直な意見を交わした。さらに、登別伊達時代村、登別グランドホテルと登別マリパークで実務研修を行った。観光施設とホテルの現場に身を置いて、各国からの観光客と直接に接触しているうちに、観光研修の本旨が深く吟味できるような気がした。



登別伊達時代村にて

視察研修：今度の研修課題に合わせて、登別市の温泉街、地獄谷、大正地獄、奥の湯、日和山、大湯沼天然足湯、登別マリパーク、登別伊達時代村、クッタラ湖やオロフレ峠などさまざまな観光名所を視察して、登別市の観光資源の魅力に深い感銘を受けた。

祭の参与：日本全国において、伝統的な祭りだけではなく、各地方では地元の特徴に合わせた独自の行事も行われている。今年は登別市市制施行40周年という節目を迎え、豊水まつり、元鬼まつり、地獄まつり、刈田神社祭典、漁港まつりなどの伝統祭りを盛大に催し、また、盆踊り、クッタラ湖灯籠流しや地獄谷での鬼花火などの催しも行われた。日本の伝統文化と地元の風俗を身近に体得できた。その中で、8月に行われた地獄まつりは登別市の一番重要な伝統の祭りで、毎年何万人以上の参加者をひきつける盛大な地元まつりと言われる。祭りの日、私はスタッフの一員として、お昼から祭りの準備作業に参加し始め、忙しくて楽しかった。日本の祭りは主に民間からなる実行委員会が運営するというわけで、一般の市民を始めとする多くの人々から協力を得て、市民の参加意欲を高める一方、市政に大きな負担をかけずに済むと感じた。

③ 道内、道外研修視察

観光研修の重要な一環として、北海道内外研修視察を行った。道内研修では、札幌の現代化に溢れた町、小樽のきれいな運河、富良野のラベンダー、有名な旭山動物園、そして函館の夜景などを見物して、北海道観光の魅力を再び感じさせてもらった。道外研修では、東京と千葉に行って、日本の一番繁栄な町に身をおいて、北海道の観光資源とは異なった点を味わうことができた。



中華料理教室にて

④ その他

研修の中で、中国語講座、中華料理教室や国際文化講座なども実施された。中国語講座では定期的に市役所の職員たちを対象に簡単な挨拶と基本的な文法知識を教えた。6回しか行わなかったが、職員たちが興味津々と積極的に参加してくれた。また、学生や一般市民に向けて、中国及び天津市の紹介を通

じて、皆さんに中国を深く理解してもらった。中華料理教室では市民の皆さんと一緒に水餃子を作って、雰囲気盛り上がった。また、7月に中国広州市からの代表団の接待仕事に関わり、歓迎レセプションの通訳などを任せられた。

(3) 課題と結論

登別市は登別温泉とカルルス温泉を抱える北海道有数の観光都市である。湧き出る湯量は豊富で一日1万トン、9種類の泉質を有し、温泉のデパートとも呼ばれている。温泉だけではなく、地獄谷、大正地獄、日和山というさまざまな観光名所を持つため、世界中の観光客を魅了している。今回の研修を通じて、観光を基幹産業とする登別市の観光方針、運営方法及び観光業への取り組みなどを深く理解できた。わが国は観光を国の重要産業として位置づけ、これから更なる振興を図ることが大きな課題になると思う。しかし、両国の観光業の現状を比較してみれば、相違が幾つか見つかった。

① 中国は数多くの観光スポットそれぞれに力を入れているのに対して、日本は当地域の観光資源を全体的に考えることが好きだ。例えば、温泉観光地にあるホテルに泊まったら、日本伝統的な和室や温泉を楽しむとともに、本場の日本料理も食べられる。また、周りにはさまざまな観光名所があり、散策し見物できるように工夫している。夜になると、花火などを楽しんだ後、ホテルに戻ってくる途中で、商店街を歩き買い物をするのも観光の楽しみの一つである。

② 中国の場合、観光ガイドの資格の取得は国家試験となっており、資格と等級に分けられている。それに対して、日本には同様な試験制度はないが、一部の有料ガイドのほかボランティアのガイドも多いという。また、中国の試験の中で、観光に関する専門知識や外国語の試験も含まれ、プロのガイドになるために、比較的正式な訓練を受ける必要がある。

③ 現在、中国は国内の観光客を重点として努めてきたのに対し、日本は中国人、韓国人など外国人観光客の受入をますます重要視して、色々工夫しているところだ。例えば、外国語が話せる係員を駅や店などに配置したり、外国語の観光パンフレットを観光案内所やホテルに置いていたり、百貨店や飲食店の営業時間をある程度延長したりするようになってきた。

中国と日本とは同じアジアにおける隣国であり、またそれぞれに独特な観光資源を持っている観光国でもある。最近、中国人観光客向けの個人観光ビザ発給緩和などにより、今後日本では中国人観光客の更なる増加が期待されていると思う。

3. 終わりに：

時間が経つのは早いものだ。あっという間に、6ヶ月の充実した研修生活はいよいよ終わりを迎える。短い研修期間だが大きな収穫があり、私にとって、人生の貴重な思い出になり、これからも大切にしたいと思う。

近年来、中日両国の友好交流と経済関係がますます緊密化されてきて、各分野の交流事業も盛んに行っている。しかし、現在両国はお互いの理解の不十分なところも、交流や連携の足りない部分もあると実感した。これから、両国は自分の長所を最大に生かし、短所を補い合い、中日双方の相互理解を一層深めるように努力していくべきなのではないかと考えている。それに、私は研修で身につけた知識と経験を職場でうまく生かして、微力ながら、橋渡しとして引き続き努めていきたいと思う。

最後に、今度の事業にご尽力いただいた日本総務省、CLAIR、JIAMの皆様、また登別市小笠原市長をはじめとする市役所の職員の方々、観光協会の皆様、熱心な市民の皆様に対して、深く感謝の意を申し上げたいと思う。また再会できる日を楽しみにしている。